

第69回  
文学部

## 講演テーマ 文学とダンス ―学際的研究をめぐって―

講演者 やまぐち ようこ  
山口 庸子 教授

人文学研究科 人文学専攻文献思想学系



## 教員の講演内容

偉大な作家の作品に沈潜してその意味を探る、というのが文学研究の一般的なイメージでしょう。作品が非常に重要であることはもちろんですが、研究の手法は多様化しています。身体性に注目する、という方法もその一つです。「文学とダンス」というタイトルで講義をする、無関係と思っていた分野の繋がりがわかってびっくりした、という感想をしばしば頂きます。専門的な知を深めると同時に、複数の視点を意識することで、新しい問題やその解決策を発見する可能性が広がります。本講演では、そのような学際的な研究の魅力についてお話ししたいと思います。

## ◆研究トピックス

私の専門は、ドイツ文学、舞踊史、身体文化です。現在は、女性詩人ゲルトルト・コルマルの研究のほか、20世紀初頭のドイツ語圏を中心に、思想や文学における人間像・身体像の変化と、新しい舞踊や人形劇の成立との関連を研究しています。また研究成果の学外への発信も積極的に行っています。すでに6回を数えた『ダンス・スコア特別講座シンポジウム』(東京外国語大学の研究グループ・愛知県芸術劇場と並び主催)では、毎回、ダンスに関わるテーマで多様な分野の研究者をお招きし、多くの市民の方々にご参加を頂いています。

- 13:00～  
名大教員による講演
- 14:00～  
大学院生による講演
- 14:40～  
質疑応答

## 大学院生の研究内容 ①

所属・専攻: 人文学研究科 人文学専攻  
専門分野: 言語学

「私は昼ご飯を作る。」とI make lunch.の二つの文は、同じ意味を表していますが、日本語の文では動詞が文末に来るのに対し、英語の文では動詞が主語と目的語の間に置かれます。このように、言語によって語順は様々です。例えば、我々にとって馴染み深いSOV型とSVO型のほか、動詞が文頭に来るVSO型も存在します。言語学は、世界中の言語の間に見られる共通性を見出し、言語の本質的な特徴を明らかにしようとする学問です。

人間の言語は、音、単語、文、意味など様々な要素から成り立っており、それぞれの要素に応じた下位分野が存在します。その中で私は、日本語母語話者と日本語学習者の音声の違いに関心を持ち、研究を進めています。

## 大学院生の研究内容 ②

所属・専攻: 人文学研究科 人文学専攻  
専門分野: 日本史学

私たちが生きる日本とはいったい何なのでしょう？ この問いを探究すべく、戦前の日本について、樺太という植民地に焦点を当てながら研究しています。今日の日本を考える上で、アジアとの間に山積する歴史問題の存在が特に重要な意味を持っていると思われるからです。このような歴史問題の多くは、日本が明治時代以降に勢力を広げた過程や結果に由来していると考えています。過去について知るためには、新聞や雑誌、個人の手紙や日記などの過去の断片を集める必要があります。そのため、様々な場所に足を運び、出会うことのできた情報を読み解きながら、植民地帝国であった日本について研究し続けています。

第70回  
医学部

## 講演テーマ DNAの傷を直す仕組みを解き明かす

講演者 なかざわ ゆか  
中沢 由華 教授

医学系研究科 神経疾患・腫瘍分子医学研究センター



## 教員の講演内容

ヒトの遺伝情報はDNAで記録され、次世代へ受け継がれています。しかしDNAは、様々な要因によって日々傷つけられています。生物は、これらの傷を直す仕組みを備えており、生体の恒常性を保つとともに、遺伝情報を安定に維持しています。このDNAの傷を直す仕組みを調べ、その異常によって発症する疾患を理解し、治療薬開発へと繋げる一連の研究について、最新の解析技術にも触れながらお話しします。

## ◆研究トピックス

DNA修復機構は、体を構成する全ての細胞で機能する基本的なシステムですが、まだ解明されていない点も多く残されています。この機構の異常は、がんの発症や老化の進行にも関係することが示唆されており、詳細なメカニズムの解明は医療分野にも大きく貢献します。私たちは、次世代ゲノム解析などの最新技術を取り入れながら、分子遺伝学および分子細胞生物学的な解析により、DNA修復機構と疾患発症メカニズムの解明に取り組んでいます。

- 15:00～  
名大教員による講演
- 16:00～  
大学院生による講演
- 16:40～  
質疑応答

## 大学院生の研究内容 ①

所属・専攻: 医学系研究科 医科学専攻  
専門分野: 病態神経科学

皆さん、筋萎縮性側索硬化症(ALS)という病気を知っていますか？ ALSは、脳から筋肉へ「動け」と指令を伝える神経細胞が徐々に壊れ、全身の筋肉が動かしにくくなっていく病気です。進行すると、呼吸に必要な筋肉も弱まり、命に関わります。現在も根本的な治療法は確立されていません。ALSの患者の神経細胞では、異常なタンパク質の塊ができることが知られています。近年では、この塊が神経細胞だけでなく、それを支える「アストロサイト」という細胞にも見つかることが分かってきました。私は、このアストロサイト内の異常が細胞に与える影響を調べ、ALSの新たな治療法につながる発見を目指しています。

## 大学院生の研究内容 ②

所属・専攻: 医学系研究科 総合医学専攻  
専門分野: 細胞生理学

皆さんが日々覚えている英単語の知識や何気ない友達との会話は、脳のどこに、どうやって保存されるのでしょうか？ 記憶を留める鍵となるのが「海馬」という領域です。脳内では、神経細胞同士が電気信号をやり取りし、特定の繋がりを強化することで情報を記憶します。記憶の要である海馬でもこの仕組みが働いていますが、実はこの時、情報を受け取った細胞も逆向きの信号を出しており、この信号同士の絶妙なタイミングの差が繋がりの変化に影響します。私はこの信号の発生源である「軸索起始部」という小さな領域に着目し、細胞の電気活動を直接測ることで、記憶が作られる精巧な仕組みに迫っています。

